特　集　防災教育

□過去の教訓をどのように教育に生かすか

兵庫県立大学環境人間学部／大学院環境人間学研究科　准教授　木　村　玲　欧

１．「大災害時代」を生き抜くために「わがこと意識」を持つ

21世紀前半、日本は「大災害時代」を迎えるとも言われています。東日本大震災や南海トラフ巨大地震のような、巨大津波の可能性がある海溝型地震、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震、熊本地震のような、地面の真下が激しく揺れる内陸型（直下型）地震、そしてそれらに連動するように発生する火山噴火。

さらには地球温暖化が原因とも言われている、異常気象による災害も増えています。熱帯雨林のスコールのような雨が、私たちの地域に降り注ぎます。一般的に、ゲリラ豪雨とか、爆弾低気圧とか言われていますが、このような「今までにない」現象によって、大雨による洪水、浸水、土砂災害が日本中で多発しています。

これからを生きる人々にとって、地震・火山や異常気象による災害は、「めったに起きないもの」ではなく、「頻繁に発生して、その度に命を脅かすもの」という認識を持つべきなのです。これを「わがこと意識」と言います。そして災害の怖いところは、私たちの人生にとって初めて起こったその１回の災害が命を奪ってしまう本番の１回になってしまうのです。「私たちのこれまでの経験で何とかなる」ものではないのです。ですので「東日本大震災や阪神・淡路大震災、熊本地震、御嶽山の噴火、広島や茨城などの水害が自分のところで起こったらどうなるのか」と、よその土地のできごとを「わがこと」のように考える、もしくは「都道府県や市町村で発行されているハザードマップ」によって自分たちがどのような危険にさらされているかを考えるなど、想定される被害・影響を知り、それについての対応・対策・マニュアルを考えておき、来たるべき１回に備えて継続的・発展的に自分たちの危機管理能力を高めていかなければならないのです。

２．「わがこと意識」は「現実性」「地域性」「人間性」で向上させる

それではどのようにすれば「わがこと意識」を上げることができるでしょうか。それには「現実性」「地域性」「人間性」という３つの要素がポイントだと考えられます（図１）。

まずは現実性です。実際に何が起きて何が教訓として残っているのか、まだ起きていないことについては科学的な想定によって何が起こると考えられるのか、「現実に起きた」こと「科学的に起きる」ことを見せることが必要です。例えば、コンピュータグラフィック（CG）の津波シミュレーションをそのまま見せられても、「すごいなあ」というインパクトだけでなかなかイメージが湧きません。そこにどれだけの現実性があるのか、過去に起きた何かの再現なのか、現実に起きると科学的に想定されているのかという情報を併せて示す必要があります。

次が地域性です。「自分たちが生活をする地域

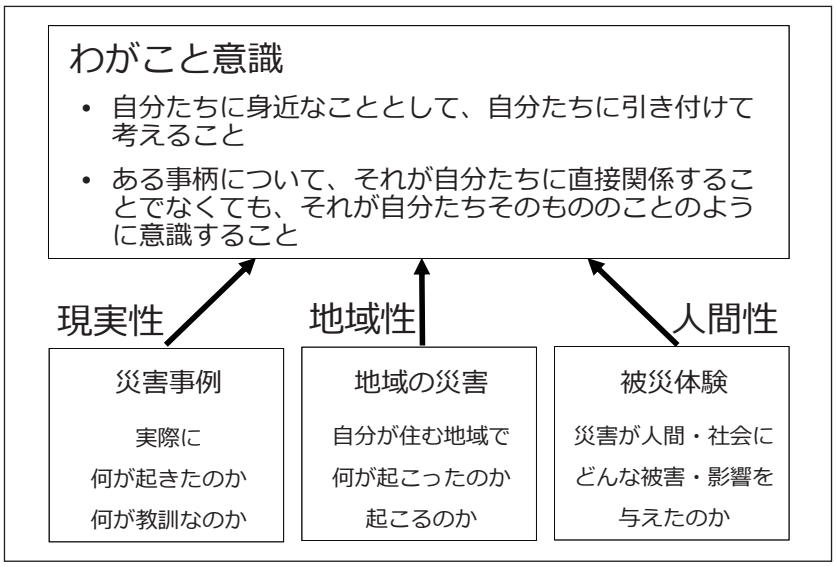


図１　災害に対する「わがこと意識」を高めるためには

の範囲内で」実施に何が起きたのか、何が起きるのかということを見せることが必要です。例えば、ハザードマップのようなものも、自治体全体という広域を１枚の地図に押し込めてシミュレーションの結果を色塗りで表示するだけではなく、例えば小学校区や中学校区単位で、地域で何が起こるのか、過去に何が起こったのか、その時に使える資源はどこに何があるのかなどの事実をあわせて提示することで、人々の災害に対するイメージと「わがこと意識」が養われます。インターネット上で地図の範囲や縮尺を変えられるものなど、地域性を高める工夫をしているハザードマップや防災マップも増えてきました。

もう１つは、人間性です。南海トラフ巨大地震で死者が323,000人、建物全壊が約250万棟という全体の数字を見せるだけでなく、「災害が１人１人の人間にどのような被害・影響を与えて、生活を続けようとする上でどのような苦労や困難があって、そこからどう立ち直っていくのか」。このような人間のストーリーを示すことで、災害や防災に対する「わがこと意識」が高まるのです。特にこの人間性については、災害という非日常がわかりにくい子どもたちに対して有効です。小学校の図書館で「伝記コーナー」が設けられているのも、ある偉人の人生を通して「あきらめない力」「様々な人と協力する重要性」「その偉人が取り組んだ事象そのものの魅力」などを学んでもらうことも意図しています。これは子どもだけに限らず、NHK「プロジェクトX」では、ある技術・構造物などの誕生をテーマにしながら、それにまつわる人々が問題・困難にいかにして挑み・乗り越えていくのかという人間の物語が、視聴者の心を揺さぶり感情移入させやすくしたと考えられます。

３.「被災体験談」は「貴重な教材」である

「現実性」「地域性」「人間性」を兼ね備えた「わがこと意識」を向上させる資料にどのようなものがあるのかと考えていくと、「過去の災害の被災体験談」が１つの解として出てきます。過去の災害の被災体験談は、子どもたちに（もちろん大人たちにも）多くの気づきと学びを与えてくれます。実際の教育現場でも、例えば、小学生の地域学習・調べ学習で過去の被災体験について地域の高齢者から聞き取りを行ったり、高校の地理で被災者の体験談をもとにした避難行動を地図上

（GIS）に表現したり、国語の時間などに被災体験談を読んで感想文や被災者の方へのお手紙を書いたり、被災体験談をもとに劇や紙芝居・ラジオドラマなどを作成して学習発表会や文化祭、校内放送でお披露目したりと、さまざまな場面で貴重な資料として活用されています。

そこで私が愛知県で行ってきた活動を紹介します。日本が戦争をしていて敗戦濃厚となった1945年（昭和20）１月13日午前３時38分に、愛知県東部の三河地方で「三河地震」が発生しました。熊本地震と同じ「内陸型地震」です。死者2306人という大被害であったのですが、「地震で被害があったことを報道すると、国民の戦意喪失につながり、海外にも軍需重要産業地域である愛知県の工場に被害があったことがバレてしまう」という理由で、具体的な被害などは報道されませんでした。そして戦後の混乱期、高度経済成長の中で、この地震のことは人々から忘れ去られてしまいました。そのため三河地震は、戦争に隠された地震、戦争から葬り去られた地震と言われています。三河地震、またはこの37日前に発生した東南海地震の実態について知りたい方は、拙著『戦争に隠された「震度７」―1944年東南海地震・1945三河地震』（吉川弘文館）をご覧ください。

小学生に対する防災教育教材を作成するにあたって、対象とする児童（今回は小学校高学年）の防災教育教材に適切な体験談を選ぶ必要がありました。そこで震災当時に対象者とほぼ同じ年齢であった、沓名美代（くつな・みよ）さん（当時11歳）、鈴木敏枝（すずき・としえ）さん（当時15歳）の姉妹の被災体験をとりあげました。以下に要約します（図２）。

鈴木敏枝さんは昭和４年、沓名美代さんは昭和８年生まれの姉妹。地震発生当時は15歳と11歳。愛知県碧海郡明治村和泉集落（現在の愛知県安城市和泉町）に住んでいました。

三河地震の37日前、1944年12月７日の東南海地震が発生しました。自身が発生した午後１時すぎ、妹の沓名美代さんは尋常小学校の６年生でお宮参りをしていました。地面の揺れが大きかったので男子生徒があわてて神社の灯ろうにしがみついたところ、灯ろうが揺れはじめたので、先生があわてて「灯ろうから離れろ！」と叫びました（1）。一方、姉の鈴木敏枝さんは農家である家の仕事を手伝っていて麦畑の中にいました。中腰になりふらふらになりながら家までたどり着いたところ、

図２　1945三河地震の被災体験談

寝泊まりをする本宅（母屋）が傾いてしまっていたために、父親が「こんな傾いた家で寝泊まりするわけにはいかない」と、本宅の横にあって、普段は寝泊まりをしない横屋の座敷に移って生活することになりました。

1945年１月13日の三河地震は深夜３時30分過ぎの地震でした。本宅は全壊しましたが寝泊まりをしていた座敷は無事で、家族は助かりました。小学生だった美代さんは逃げ込んだわら小屋の中で毛布をかぶって震えているしかありませんでした。外へ出たときの壁土のほこりとにおい、生き埋めになった人の「助けて、助けて」という泣き声は、今でも鮮明に覚えています（2）。助けにいきたくても、自分の家がそれどころではなく、ガレキの山で道路がふさがれてしまい、助けに行きようがありませんでした。突然、隣りのおばさんが「火事だ」と叫んだため姉の敏枝さんがバケツを持って駆けつけたところ、仏壇が月明かりに照らされて光っているだけで事なきを得ました（3）。

周囲の家はほとんど全壊しました。毎日、寒空の下、素手素足で着のみ着のままで、朝から夜まで片づけをしました。親戚なども同時に被災したため、片づけを誰かに手伝ってもらったり、物資をもらったりしたことはありませんでした（4）。周囲で１軒だけ倒れていない家がありました。そこは大工の腕が悪く、家が自立しないために筋交いを入れていた家だったのですが、地震のときには倒れなかったのです。木は全部燃料として燃やし、瓦は地割れの中に捨てました（5）。和泉集落では80数名が亡くなりましたが、火葬場の煙突が壊れ、また、あまりに多くの人が一度に亡くなったため火葬はできず、穴を掘って集団で土葬しました。火葬しなかった理由には、軍の基地が近く、頻繁に空襲警報がでるような情勢だったことも影響したかもしれません。

家が倒壊したため、炊事は数家族が共同で行い、露天で一緒に食事をしました。農家のため食料はあり、井戸水は涸れなかったため水の不自由もありませんでした。地震で死んだ農耕牛を食べることができたのは子ども心によい思い出です（6）。１週間くらいして落ち着いてきたときに、お座敷のふすまや雨戸を外して四面に囲い縄でしばって「ふすまの家」を作りました。すき間から雪が家の中にまで降ってきて大変寒かったことを覚えています（7）。数週間した時に、父親がお風呂（五右衛門風呂）を屋外へ作りました。近所の人たちも入りにきて行列になりました。お風呂に入ったときに体も心もほっと一息つくことができました（8）。

１ヶ月くらいしてきれいに片づけた後に、わらなどで小屋を作りました。農家なのでわらはあったし、家を作るくらいは当時の農家の人たちの技術からすると簡単でした。これらの小屋は「地震小屋」と呼ばれました（9）。学校は３ヶ月くらいして再開しました。学校も地震で全壊したために、空き地に縄を張ってクラスを作り、先生は首から黒板をかけて授業をしました。雨が降ったり空襲警報が鳴ったりするたびに授業が中断したため、戦争が終わるまではほとんどまともに授業ができませんでした（10）。

４．「被災体験談」から「教訓」を取り出す

沓名美代さん・鈴木敏枝さんの体験談を基にワークシートを作成しました（図３）。沓名さん・鈴木さんのお話を実際に聞く／（体験談などを撮影した）ビデオを見る／体験を読んだ後に利用するワークシートです。「沓名美代さん・鈴木敏枝さんは、地震でどんな体験をしたのでしょうか。絵をヒントに思い出してください」というリード文の下に、質問に対して絵を見ながら場面を思い出すような問いを立てていきました。問いは地震発生後の被災体験に沿った問で、体験談を思い出すことができますし、かつ、その解答から災害・防災に関する教訓を得ることができるものです。

1 体験者のお話を復習しましょう。

皆名美代さん・鈴木敏枝さんは、地震でどんな体験をしたのでしょうか。絵をヒントに、思い出してください。

1）神社にいるときに地震が起きました。その時に、男の子がとても危険なことをして先生に怒られました。男の子はどんな危険なことをして怒られたのでしょうか。

回答例

地震でゆれて、くずれそうになっている石のとうろうにしがみついた。

2）夜の地震で、ふだん住んでいた家は全壊したのに、家族は誰も亡くなったりケガをしたりしませんでした。なぜ、みんな無事だったのでしょうか。

回答例

１２月の地震で家（母屋）が傾いたので、父親が「こんな家に住んだらいかん」といって、傾いていなかった家（横屋：横にある座敷の家）で寝ていたから。

図３　被災体験談を基にしたワークシート

3）近所で１軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか。

回答例

へたくそな大工さんが建てた家で、家が倒れないように「筋交い（すじかい）」を入れていたから。

4）地震が起きた後、朝から夜まであることをしていたため、半月ぶりにお風呂に入ったときには体は真っ黒でした。朝から夜までどんなことをしていたのでしょうか。

回答例

朝から夜まで、寒空の下で、素手素足で着のみ着のままで、こわれた家の後かたづけをしていた。

（近隣の親せきも同時被災したので助けがなかった）

5）地震が起きた後も、水や食べ物がなくならなかったのはどうしてでしょうか。

回答例

井戸がやられなかったので水が出たし、農家だったので食べ物をたくさんたくわえていたから。また、近所で助けあって食事を作っていたから。地震で死んだ牛（農耕牛）を食べることができたから。

6）地震から１ヶ月後に、ようやくちゃんとした家を建てることができました。それまでは、夜はどんなところで寝ていたのでしょうか。

回答例

ふすまや雨戸を組みたてて作った家、わらを組んで作った家で寝ていた。

（避難所などの公助による支援はなかったので、自分たちの技術（農家）で家を作った）

7）学校は地震で壊れてしまいました。教室はどこに作って、授業はどんな方法で行っていたのでしょうか。

回答例

空き地にロープを張って教室を作った。先生は黒板を首から下げて授業をした。

（雨が降ったり、空襲警報になると学校は終わってしまい、ろくに勉強できなかった）

図３　被災体験談を基にしたワークシート（続き）

問１では「神社にいるときに地震が起きました。その時に、男の子がとても危険なことをして先生に怒られました。男の子はどんな危険なことをして怒られたのでしょうか」という問いを立てました。子どもたちは話を思い出したり、絵を見ながら「地震でゆれて、くずれそうになっている石のとうろうにしがみついた」という解答に近づいていきます。答えあわせが終わった後、さらに指導者から「地震発生時には危険なものには近寄らない」ことと「ブロック塀、電柱、自販機にも気をつける」ことを説明します。

問２では「夜の地震で、ふだん住んでいた家は全壊したのに、家族は誰も亡くなったりケガをしたりしませんでした。なぜ、みんな無事だったのでしょうか」という問いを立て、「12月の地震で家（母屋）が傾いたので、父親が『こんな家に住

んだらいかん』といって、傾いていなかった家（横屋：横にある座敷の家）で寝ていたから」という答え合わせをした後に、「地震は連続して起きるために危険なところに身を置かない」ことについて説明します。

問３では「近所で１軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか」という問いを立てて、「へたくそな大工さんが建てた家で、家が倒れないように筋交い（すじかい）を入れていたから」という答えあわせをした後に、筋交いについて説明します。

問４では「地震が起きた後、朝から夜まであることをしていたため、半月ぶりにお風呂に入ったときには体は真っ黒でした。朝から夜までどんなことをしていたのでしょうか」という問いを立て、「朝から夜まで、寒空の下で、素手素足で着のみ着のままで、こわれた家の後かたづけをしていた」という答えあわせをして、「道具がないと後かたづけもできないが、これは現代でも同じで、家や地域に備えがないと結局同じことになる」ことや「親戚が近くに住んでいると同時被災して人手にならないことがあり、遠くの親戚が役立つことがある」ことなどについて説明します。

問５では「地震が起きた後も、水や食べ物がなくならなかったのはどうしてでしょうか」という問いを立て、「井戸がやられなかったので水が出たし、農家だったので食べ物をたくさんたくわえていたから（食べ物の別解答：近所で助けあって食事を作っていたから。地震で死んだ牛を食べることができたから）」という答え合わせをして、「今は上下水道なので断水することがあり、昔の井戸水の方が災害に強い（ただし地震で水脈が切れて断水することがある）」ことや「食べ物も農家以外では調達が困難な場合が多い」こと、さらに時間がとれるならば「電気・ガス等のライフラインが止まった生活不便を考えてみる」ことについて考えていきます。

問６では「地震から１ヶ月後に、ようやくちゃんとした家を建てることができました。それまでは、夜はどんなところで寝ていたのでしょうか」という問いを立て、「わら小屋、ふすまや雨戸を組みたてて作った家で寝ていた」という答え合わせをして、「家が無事（横屋は無事）でも、余震が怖くて、家の中で寝ることができなかった」事実についても説明します。

問７では「学校は地震で壊れてしまいました。教室はどこに作って、授業はどんな方法で行っていたのでしょうか」という問いを立て、「空き地にロープを張って教室を作った。先生は黒板を首から下げて授業をした」という答え合わせをして、「落ちついて勉強できなかった」ことや「地震や戦争によって、遠足なども中止で、小学校の思い出がほとんどない（妹の美代さんの後日談）」についても触れます。

５．「教訓を学ぶためのプログラム」を作る

沓名美代さん・鈴木敏枝さんの体験談を学ぶための一例を示します（図４）。１時間目のプログラムは、最初の10分がインストラクションおよびチェックリスト（評価シート）の記入、次の10分が、地震がもたらす被害・影響について映像・画像をもとにした紹介（三河地震における地域被害についても紹介）、残りの25分は被災体験者（沓名美代さん・鈴木敏枝さん）と司会者との対談形式の語り聞かせでした。２時間目は、子どもたちはワークシートに解答し、またその過程で被災者の方が教室を巡回して子どもたちと交流を持ちながら答えあわせをしていくことで、「記憶の定着化を図ると同時に、災害を身近に感じて『気づき』を得る」ための時間としました。

図５が子どもたちによる気づきの一部です。「地震がきて家がくずれてしまったけど、米とか牛の肉や水があったのでよかった」「地震が起き

図４　被災体験談を基にした学習プログラム例

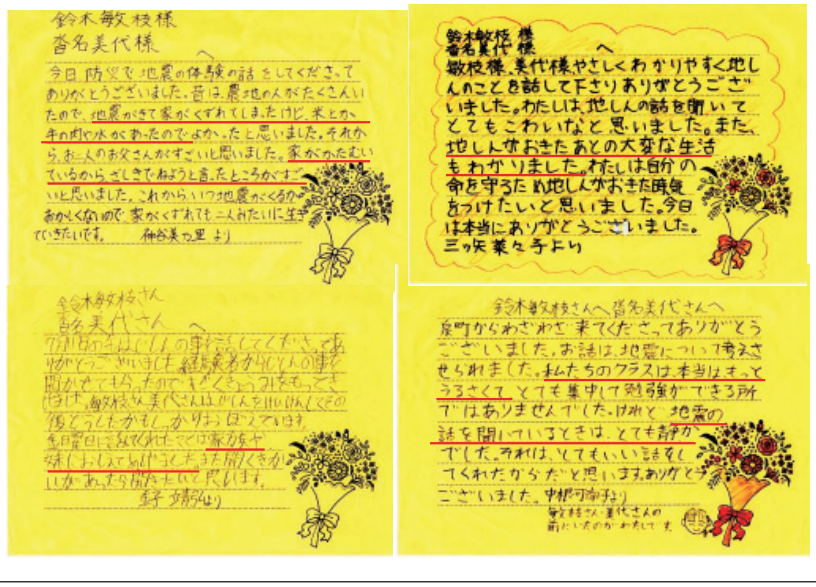


図５　子どもたちの「気づき」

たあとの大変な生活がわかった」といった地震後の生活についての理解をはじめ、「家族や妹におしえてあげました」「地震の話を聞いているときはとても静かでした」など、被災者の実際の体験談と、絵画およびワークシートによる災害・防災教訓の提示・定着化は、子どもたちに少なからずのインパクトと地震に対する気づきを与えていたことがわかります。そしてこの気づきが、その後の１年間の防災学習につながりました。

ある児童は「災害によって自分たちの生活がどのように変化するかを知りたい」という知的好奇心を持つようになり、避難所での生活をまとめました。その後、実際に自分のまわりの地域がどのように変化するのかについて興味を抱き、クラスの児童たちで手分けをして「地震防災マップ」を作りました。自分の生活地域で安全なところ・広いところ、役に立つところ、公共の場所、危険なところをマッピングしていったのです。さらに活

動をする中で、自分たちの意見だけではいけないということで、試作マップを町内会に戻して、町内会の人や町内会長にチェックをしてもらいました。そして「せっかく町内会の人にも見ていただいたのだから」ということで、小学校が必要部数を刷って、子どもたちが町内に配布するという活動を行いました（図６）。

また、別の児童は、被災者の二人の姉妹の体験談を家に帰って話しましたが、60年以上前の三河地震に対する家族の反応がいまいちであったという体験をしました。自分の「気づき」と大きなズレがあったのです。そこで「三河地震のことを地域の人に知ってもらいたい」という欲求が高まり、2008年11月15日の小学校学芸会のときに、被災体験を基に三河地震の創作劇を演じることで、観客である地域住民に三河地震の災害像と教訓を伝

図６　みんなに危険な場所を気づいてほしい

図７　勉強した地震のことを伝えよう

えました（図７）。劇については、台本をはじめ、衣装、大道具、小道具など全部児童たちが作りました。これらの作成にあたっては三河地震の絵画を参考にして、道具を作ったり、場面を設定したのです。例えば、図８・図９にあるように、筋交いの入った家や生活を立て直すという、さまざまな災害・防災の知見・教訓について、一場面ずつ劇にしていきました。

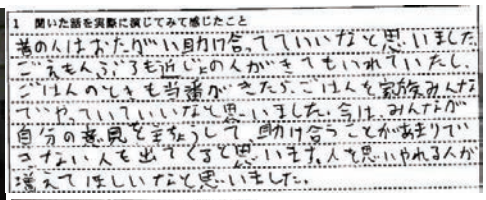
６．「子どもたちの気づき・学び」が結実して「未来への防災」につながる

2008年11月15日の学芸会の時には、被災者姉妹を招待して上演をしました。演じた子どもたちの感想を見ると「昔の人はおたがい助け合ってていいなと思いました。ごえもんぶろも近じょの人がきてもいれていたし、こはんのときも当番がきた

図８　筋交いのはいった家

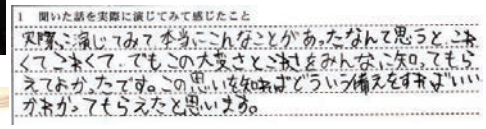
図９　生活を立て直す

最後に絵を写しながら合唱



1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

昔の人はおたがい助け合っていいなと思いました。ごはんをふろも近じょの人がきてもいれていたし、ごはんのしき物も当番がきたら、ごはんを家族みんなでやっていていいなと思いました。今は、みんなが自分の意見を主ちょうして助け合うことがあまりでこない人も出てくると思います。人を思いやれる人が増えてほしいなと思いました。



1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

実際に演じてみて本当にこんなことがあったなんて思うと、こわくてこわくて、でもこの大変さとこわさをみんなに知ってもらえてよかったです。この思いを知ればどういう備えをすればいいかわかってもらえたと思います。

お客さん（右下が被災者の敏枝さん・美代さん）

・連合町内会長「町内にある井戸の総点検を４月以降に行う」

・家族：家族防災会議の開催と防災ハンドブックの作成

図10　演じた子どもたちとお客さんの感想

ら、ごはんを家族みんなでやっていていいなと思いました。今は、みんなが自分の意見を主ちょうして、助け合うことがあまりできない人も出てくると思います。人を思いやれる人が増えてほしいなと思いました」、「実際、演じてみて、本当にこんなことがあったなんて思うと、こわくてこわくて、でもこの大変さとこわさをみんなに知ってもらえてよかったです。この思いを知ればそういう備えをすればいいかわかってもらえたと思います」というものがあり、地域の歴史災害の被災体験が子どもたちの「気づき」や「わがこと意識」を高めていることがわかります。また招待客には志貴小学校の校区がある地域（尾崎町）の連合町内会長も含まれていて、劇を見た連合町内会長は「地震後の水の大切さが印象的だった」ということで町内にある井戸の総点検を行いました（図10）。ここでは簡単に述べましたが、もっと詳細な沓名・鈴木姉妹の被災体験談や被災体験を防災教育に生かす方法、または災害後の長期間にわたる被災体験をオーラルヒストリーとしてどうまとめるかの方法・実例については、拙書『歴史災害を防災教育に生かす－1945三河地震－』（古今書院）をご覧ください。

三河地震は約70年間の災害ですが、地域にとっては貴重な知恵・教訓です。もちろん地域の歴史災害がないところは、自分の地域と土地条件が似ているような地域の災害でも「地域性」は担保できます。過去にどの地域でどのような災害があったのかについては、各自治体のホームページを参照されたり、『日本歴史災害事典』（吉川弘文館）などをご参考いただければと思います。「わがこと意識」を育てるために、過去の歴史災害に防災・減災のいのちを吹き込み、未来へと生かすための試みを、ぜひみなさんの地域・組織でも進めていただければと願っています。